

# 中国と日本の正月行事

劉 明  
鷺尾紀吉

## <目次> はじめに

1. 中日お正月の始まり
  - 1.1 中国の新年の始まり
  - 1.2 日本の新年の始まり
2. 中国と日本の正月行事の類似点
3. 大同小異の行事項目
4. 行事内容の違い
  - 4.1 飾り物の違い
  - 4.2 食べ物の違い
  - 4.3 縁起の違い
  - 4.4 年越しを行う時間の違い

おわりに

## はじめに

日本と中国は一衣帯水の隣国関係をもち、日本の年中行事には中国古代の年中行事の影響を受けたものが実に多い。しかし、国の違いにより、最初は同じものでも、その後の変化はそれぞれ違う。中日両国の一番代表性をもつ伝統的な行事は、具体的な内容でそれぞれどのように変わってきたのか。特に、一年の中でそれぞれ重視されている正月（正月の準備も含めて）は大切な行事である。正月は中日両国の共同行事であり、正月は一年の始まりであるから、正月は年中行事の中で非常に大切であるといえる。中国から日本に伝わった行事にはいくつかの変化があり、行事内容の飾り物、縁起などいろいろ同じところもあれば、違うところも多くある。その中で一番代表性をもっているのは正月の行事である。一年の始まりとしての正月は、最も重視されている行事といえる。

## 1. 中日お正月の始まり

### 1.1 中国の新年の始まり

では中国では一年の始まりはどうだったのであろうか。夏王朝（存在自体が怪しい）では立春頃が正月、商（いん）王朝では冬至を含む月の翌月が年初で、周では冬至のある月が年初であったとする説がある。周以降、古代～前漢の時代まで冬至（12/22頃）のある月が正月であった。やはり農耕民族なので、冬至は太陽が復活する大事な日なのだ。暦は太陰太陽暦で、閏月を入れて太陽暦と月の満ち欠けをあわせていた。紀元前5世紀頃には19年7閏法が確立された。

時が過ぎて後漢の時代、二十四節気の立春（2/4頃）の月が正月となった。冬至や春分、夏至、立冬などの太陽の星座上の位置から定める日を二十

四節気というが、その中の一つ、太陽の黄経が315度になる日が立春である。24節気は、月の満ち欠けには何ら関係しない、正確に季節を表す指標として前漢の頃に中国で作られた。どうやら気温が最も低くなる立春頃こそ、太陽の復活と考えたらしい。

西暦1世紀、1年=265.25日とする太陰太陽暦の四分暦が採用された。あくまで太陰太陽暦で、月は月の満ち欠けどおりに入れたので1年が12か月と13か月の年があった。後漢から始まった立春正月と太陰太陽暦は、以降20世紀まで中国の各王朝で受け継がれた。

ただ中国は、王様=暦をつくる人、といったしきたりがあり、王様が代わるたびに暦が新しくなった。中国では元旦に日食があるかないかなどの天文現象が政治に大きな影響を与えていたので、それがうまく予報できるよう、何度も微修正が行われたのであろう。しかし数年ごとの改暦は民衆には不評であったようで、元の時代によく新王による改暦は止めになった。

## 1.2 日本の新年の始まり

次に、日本の新年はなぜ1月1日なのだろうか？ 日本の新年の項目は、実はあっという間に終わってしまう。今は西暦が採用されてヨーロッパの新年が使われている。昔はというと、初めて暦が作られたのが推古天皇の604年、百済を通じて伝わった中国の元嘉暦が採用されたのが始まり。それ以降江戸時代まで、中国の暦をだいたいそのまま使っていたので、中国と同じ太陰太陽暦で立春年初（正月）なのである。つまり日本ではずっと立春を含む月、あるいは立春の近くの新月の日が年初だったのである。

日本で使われていた暦は、弥生時代～604年以前では不明だが、日本書紀の記録が歴史的事実になってくる5世紀以降は元嘉暦と考えられる。日本書紀の暦日も元嘉暦で計算したと考えると、よく事実と合う。その後は、以下のような暦が使われた。

- ・604～679年—元嘉暦
- ・679頃～763年—儀鳳暦

- ・ 764～862年—大汀曆
- ・ 862～1684年—宣明曆
- ・ 1685～1842年—貞享曆
- ・ 1843～1867年—天保曆
- ・ 1872年～グレゴリオ曆

## 2. 中国と日本の正月行事の類似点

中国の「年」、つまり旧曆の正月は大晦日と元旦の意味であるが、主な行事は大晦日、すなわち除夕に行う。本来、除夕の最も重要な行事は「逐儺」であった。『呂氏春秋』には「前歳一日、擊鼓驅疫癘之鬼、謂之逐除、亦曰儺」とあるが、この「儺」は原始社会の巫舞を元した踊りで、西周から春秋戦国にかけて民間で盛んに行われた。それが漢の時代に宮廷でも行われるようになり、さらに盛大な鬼遣いの行事に発展したのである。『後漢書・禮儀志』によると、東漢の宮廷で行われた追儺の様子は次のようなものである。

10歳から12歳までの小僧を120人選び、頭に赤頭巾を被らせ、黒の衣裳を着させて、太鼓を打ち鳴らして応援の役をさせながら、一人の大男が方相氏（悪疫を払う術者）に扮して、黄金の四つの目の面具をつけ、熊の皮を身につけて盾と矛を持ち、12人の猛獣に扮したお供を連れて踊る。赤頭巾の百官は宮殿の門の前に立ち、踊りの後、火把で端門から悪鬼を追い出す。そして端門の外の7千人の衛兵が、この火把を引受けて城を出る。さらに城門の外の千名の騎兵は、その火把を受取って、洛水の川の中にそれを投げ入れる。この一連の行為は、悪鬼を永遠に水の底に沈ませることを意味する。

魏晋南北朝から隋唐五代にかけて、漢と同じように追儺を行ったが、隋の南朝の人数は漢の倍に増えた。北魏の追儺は閲兵の型で行われ、南に歩兵を、北に騎兵を配置し双方を戦わせる形をとった。勿論、結果はいつも北の騎兵の勝ちになる。それは、北魏が南魏を倒すことを意味するからである。

宋代以後、追儺の内容が次第に変わり、特に明・清の時代には「かまど踊り」、「鍾馗踊り」というようになった。「かまど踊り」は、人々が顔を真黒にして町中を踊りめぐる。それに対して、観衆はお金やお米を与えた。

こうした面白く、また迷信をも織りこんだ追儺の踊りをみていると、昔の鬼儺の追儺風習が、すでに娯楽的な風習に変わってきたことが伺える。これは祭日風習の進歩だと思う。追儺は単純の迷信ではなく、当時の人々の自然災害を征服しようとする民族心理の表れである。当時はまだ科学技術が遅れていて、人々は疫病の本質を完全に認識できない段階であった。だから、神と方術の力を借りて、疫病と悪鬼儺をしたのである。

追儺の日本伝来は、文武天皇の頃だそうである。『日本書紀』によると、慶雲3(706)年「是年天下諸国疫疾、百姓多死、始作土牛大儺」とあり、大舎人の一人が仮面をかぶって方相氏の役を務め、内裏の四門をめぐって悪鬼を追い立て、殿上人も桃の弓、葦の矢で鬼を射立てたとある。これはその後、宮中だけでなく、神社や寺院、また上流階級に広がったが、鎌倉時代以降はすたれた。しかし、追儺の行事は、やがて室町中期に中国から伝来した「豆まき」の風習と合流し、2月の節分に行われるようになった。正月と節分は時間的に接近しており、時には重複することもあったので、追儺が節分の行事へと移行したのは、合理的だと思う。

漢の人は悪鬼を畏れ、特に大晦日に、悪鬼が侵入するのを心配したので、桃の木を削って、それに神奈・鬱壘という二神の絵を書いて門にかけた。これが、中国の門神の起源である。『山海経』と漢の『風俗通義』には次のような故事が書いてある。

東海中一度朔山，上有大桃樹，蟠屈三千里，其卑枝門日東北鬼門，萬鬼出入也。上有二神人一日神荼，一日鬱壘，主閱領衆鬼之惡，害人者執以葦索，而用食虎。於是黃帝法而象之，因立桃梗於門戶上，書鬱壘持葦索以御凶鬼，書虎於門，當食鬼也。（『山海経』）

おそらく二神の絵を書くのが面倒だったからであろう。魏晋南北朝からは桃の板に二神の名前だけを書くようになった。これを「桃符」と称する。北

宋の桃符は長さ二、三尺、幅四、五寸の薄い木版に、上部に浚貌・白沢などの神獣を描き、下部には左に鬱壘、右に神荼と書いた。春詞を写し、祝詞を書いたものもある。宋の王安石の詩に「爆竹声中一歲除，春風送暖入屠蘇，千門萬戶瞳瞳日，総把新桃換旧符」というのがあり、ここで「新桃」と「旧符」というのは、疫病と悪鬼儼をする桃符を指す。

唐の末から、門神は二神から鍾馗に変わった。『唐逸史』と『補筆談』によると、唐の玄宗皇帝がある時激しい熱病にかかって苦しんでいた時、不思議な夢をみた。それは、満面ひげだらけの、容貌魁偉な大男が小鬼を追いかけている夢であった。その男は小鬼をつかまえると、生きたまま呑み込んでしまったので、玄宗が「お前は何者だ」とたずねたところ、男は「私は武官登用試験に落第して自殺した鍾馗と申す者、死にはしましたが、陛下の御為に、天下の妖怪を平らげんと誓いを立て、このように鬼を退治いたしております」と答えたというのである。その後、玄宗の熱病はすっかり直ったので、玄宗は夢の中の男の姿を画家呉道子に描かせて、「鍾馗，鬼を捕えるの図」と題して宮中に掛けた。それ以来、人々は大晦日に鍾馗の絵を家の門に掲げて魔除けにするようになったのである。宋の末になると、門神は鍾馗から唐初の有名な武将である秦叔宝と尉遲敬徳に変わった。『三教搜神大全』には、それについて鍾馗と同じような内容の伝説を載せてある。

戸神，唐秦叔宝胡敬徳二將軍也。按伝，唐太宗不豫，寢門外鬼魅呼号。太宗以問群臣，秦叔宝奏云「一願同 胡敬徳戎装立門外以伺。」太宗可其奏，夜果無事，因命画工絵二人之像懸宮門，邪崇以息。後世沿襲，遂永為門神。

門神の風習の影響、さらに印刷技術の発展によって、唐末と宋初の時代に年画と春聯の風習が生まれた。春聯は対聯，門対，門貼ともいう。木版刷りでめでたい言葉や祝詞を記すようになるに従って、桃符本来の鬼遣いの意味が薄くなってきた。文献によると、五代の後蜀の太子は、宮殿の桃符に「天垂餘慶，地接長春」の八字を書いた。これが中国の最初の春聯だそうであるが、最初の春聯は「新年納餘慶，嘉節号長春」であるという説もある。どち

らにしても、春聯は五代の後蜀の時代から始まることを立証している。

宋以後、大晦日に春聯を貼る風習は盛んになる。『宋史・五行志』には「命朝林内詞題桃符，正點，置寢門左右」とあり、『夢梁錄』にも除夕「釘桃符，換春牌」と書いてある。明の太祖の始皇帝は對聯が大好きな帝王であった。彼は家ごとに春聯をつけるよう命じ、さらに町に春聯を視察するために出かけている。ある日、彼が忍んで町の除夕の様子を見に出かけた時、ある家の門に春聯が貼ってないのを見付けた。聞けば、その家の主人は猪の擧丸を取る仕事だというので、彼はその場で「雙手劈開生死路，一刀割斷是非根」という春聯を書いて与えたということである。

清の乾隆帝もよく春聯を書いた。彼が南方を視察した時、「通州」という町を通った際に、河北省にも「通州」という町があることを思い出して、「南通州，北通州，南北通州通南北」という上聯を書いて、隨行の人に下聯を作らせた。はじめ、隨行の人がいくら案を出しても、乾隆帝はなかなか満足しなかったが、ある家来が町の東西に質屋があるのに目をつけて、すぐ「東當舖，西當舖，東西當舖營東西」という下聯を作った。質屋を中国では「當舖」といい、ものを「東西」と称するので、乾隆帝は大変喜んで、この人を嘉賞するばかりでなく、出世までさせた。

これまで述べてきた正月の門飾りで、日本人が親しく感じられるのは鍾馗であろう。鍾馗を五月人形と一緒に端午の節句に飾るのは、江戸時代以降のことであるが、唐にならって正月のしめ飾り、門松の風習を採り入れたのは、平安時代からであった。平安朝の年中行事は、その由来からみて唐から入った行事が日本の宮廷に採用され、宮廷行事となったものが多いようである。しかしそれとは別に、日本の民間で古くから行われていた風習が宮廷に採用され、年中行事となったものも少なくない。そして中国から輸入された行事も、日本の民間の風習とうまく結合し、宮廷の年中行事となったものも多くある。正月の行事でもっとも大事とされたのは、「守夜」である。除夕の夜は2年にまたがっており、神様を迎える夜、家族団欒の夜なのである。

中国の歴史で、牢屋に入れた罪人を一時釈放して、家族と除夜を過ごさせ

た例も多くある。例えば、晋の県令曹某が大晦日に死刑囚に「お正月は人情の篤い祭日だから、家族に会いたくないか」と聞いたところ、囚人は「合わせて下されば、死んでも悔しくありません」と答えたので、牢屋を出してやった。囚人たちは自宅に帰って家族とお正月を過ごした後、全員時間どおりに牢屋に戻って来たということである。守夜には、火を燃すのが普通である。隋唐の時、帝王は宮廷での守歳に際して、白檀の木を燃やし、盛大な宴会を催した。隋煬帝の時、200台の馬車で運んで来た沈香と白檀の木を一晩で焼き払った。その香りを5キロ以上先でも嗅いだということである。

宋代になると、守歳の他に、「饋歳」「別歳」「辞年」などの言い方も出てきた。そして、かまど神を迎え、床の神を祭り、お年玉を与えるといった内容が加わった。「年玉」とは、年神から与えられる魂のことである。すなわち、年の魂であり、今年を精一杯生きる活力を生み出す手形である。清の呉曼雲の詩「压岁錢」には、「百十錢穿彩線長、分來再枕自収蔵。商量爆竹談簫價、添得嬌兒一夜忙」と詠まれている。饋歳とは相互に食物を送ることである。贈物の値段と多少には関係ない。その気情が重要なのである。日本のお歳暮と変わりはない。心のこもった贈物は、社会生活の一つの潤滑油ともいえよう。別歳とは互いにご馳走することであるが、饋歳と別歳は除夕に限られたものではないが、守歳は必ず除夕の夜に行う。『日本歳時記』にも、次のように書いてある。

今夜を除夜といふ、又除夕ともいふ、一年のおはる夜なれば、つつしみて心をしづかにし、礼服を着、酒食を先祖の霊前にそなへ、みづからも酒食を食し、家人奴婢にもあたへ、一とせを事なくてへぬる事を互に歓娛し、坐して以て旦をまち、旧を送り新を迎へし。

日本でも大晦日には朝早くから歳徳神をまつり、門松、注連縄、鏡餅を飾り、雑煮膳、屠蘇などの用意をして、お正月の準備をする。夜になれば、一家揃って新しい衣服を着、酒や餅などを先祖に供えて歳徳神を拝み、初春を祝いながら食事につく。除夜は一晩中起きているのが建前とされ、この夜眠ると白髪になるとか、顔にしわができるといった俗信がある。現在でも、一



晩中眠らずに元旦を迎える風習を持つ地方があるそうである。『年中行事儀礼事典』によると、青森県の一部では、一家が炉端に集まり、眠くなると隣の人の膝で横になるそうである。これは横になるだけで、寝るのではないという言訳から生まれた風習だと思う。

中国の除夕の夜には、爆竹を鳴らさなければならない。本来の爆竹は、焚火に竹をくべて爆発させるが、これは漢代からの風習である。漢の東方朔の『神異経』に、「西方深山中有人、長尺餘、犯人則病寒熱、名曰山臊。人以竹著火中、悍琳有声、而山臊驚憚」とあるように、爆竹を鳴らすのは、悪鬼と疫病を駆逐するためなのである。魏晋の時、煉丹師は硝石と硫黄と炭を交ぜると、燃焼と爆発が起こりやすいことを発見した。これが火薬の発明につながった。また火薬を竹の筒の中に入れて爆発させると、もっと激しい音がする。これが今の爆竹の起源である。

明清になると、「花火」が出現し、爆竹にも一声のもの、双声のもの、三声のものなどが出てきた。この双声の爆竹は近代のロケットの祖先であろう。爆竹が悪鬼山臊の讎から、神迎え、さらに娯楽に変わって来たことは、中国人の早期自然を征服する巫術思想が鬼神を祭る迷信思想へ転換したことを意味する。除夕の食事をいうと、一番大事なことは酒を飲むことである。『荆楚歳時記』に「正月一日、長幼悉正衣冠、以次拜賀、進淑柏酒、飲桃場、進屠蘇酒、慘牙賜、下五辛盤」とある。淑柏酒は山椒と柏葉をひたした酒である。また漢の『四民月令』には「淑是玉衡星精、服之令人身輕能走、柏是仙藥」とあり、晋の『抱朴子』には次のような伝説もある。漢の成帝の時、ある獵師が終南山の山の中で、全身に黒い毛が生え、飛ぶように走る人を見た。捕えてみると、一人の婦人で、自らいうには、自分は秦の時の宮人で、秦の落城を逃れて、山の中に入り、食べものがなく飢えていると、一人の老人が、松柏の葉実を食べるがよい、と教えてくれた。はじめは苦くて渋かったが、そのうち慣れて食べていると、飢えることもなく、冬の寒さも夏の暑さも感じなくなったというのである。その齢を計算してみると、200歳を超えていることになる。

明の李時珍の『本草綱目』でも、「柏は凋落することなく、久しきに耐え、天稟の堅凝の性質をもち、すなわち多寿の木である。ゆえに服餌に入れられる。道家がこれを湯に点じて常飲し、人々が元旦にこれを酒にひたして邪を退けるのも、みなこの意味を取ったものだ」といっている。後漢からの淑柏酒を飲む風習は、魏晋から南北朝時代へと受けつがれたが、隋唐時代になると、その酒は屠蘇酒へと変わった。梁の潘約の『俗説』に「屠蘇，草庵之名，昔有人居草庵之中每歲除夜遺閭里藥一劑，令井中浸之，至元日取水置於酒尊，合家飲之，不病瘟疫。今人有得方者，亦不知其人姓名，但名屠蘇而已。」とある。また『千金要方』によると、屠蘇酒の処方は、大黃、濁淑・桔梗・桂心・防風・白木・虎杖・烏頭などの薬八品を合わせて剤となしたものである。飲み方は、「これを咬咀いて、絳い囊にいれ、除日の薄暮に井戸の底に吊し、正旦にこれをとり出し、囊ごと酒の中にしばらくひたしておき、それから杯を捧げて『一人これを飲めば一家疾なく、一家これを飲めば一里病なし』と呪し、年の若いものから順に、東に向いて進め飲む」と書いてある。この屠蘇酒の風習は、明代になると衰運に向かった。

日本で正月の三が日、雑煮に先立って屠蘇を飲むようになったのは、平安時代からで、宮中から始まったそうである。『公事根源』によると、「弘仁年中(810~823)に起こるといふ。一人これを飲めば一家に、一家これを飲めば一村に病いなし、というめでたい効能があるため、年の初めにこれを用いるのである」と書いてある。正月の食事についていうと、三国の呉から晋にかけての揚子江下流域では、元日の朝、生の鶏卵を呑み、辛味のある五種の菜を食べる習慣があった。五辛菜とは、大蒜、小蒜、韭菜、雲台、胡菜の五菜である。こうした辛味のある菜は、五臓のはたらきを活発にすると考えられている。唐代には、元日の食品としてワンタンがあらわれた。宋代には長寿面というそばを食べるようになった。これは日本の年越しそばと同じである。明清時代には、「年糕」もしくは「春糕」と称する、小麦以外の穀類を原料とし作られた食べ物を食した。糕は中国語では「高」と同じ発音であるので、年の豊かなことと向上に通ずる意味から食されたという。明代から、

中国の北方地域では「餃子」が用いられた。餃子の美味しさはいうまでもないが、餡をいっぱい入れると、財産が多くなり、生活が豊かになるという俗信もある。

日本はどうであろうか。『日本歳時記』には次のように書いてある。「礼終て春盤をなむ、和国の風俗にて、盤上に松竹、鶴亀などを作つてすゑ、栗、榎、海藻、海蝦、みかん、かうじ、たちばな、米、柿などつみかさねて、これをなむ、歳初に来る賀客にも是をすすむ、是を蓬菜といふ、蓬菜は仙嶋なれば、その名とするならし、もろこしにも春生菜などを盤上に盛り、春盤と名付て、なむる事あるよし、四時宝鏡に見えたり、さればこそ杜子義が詩にも、春盤細生菜とつくれり、また周処が風土記に、正旦楚人五辛盤を上る事を志るせり、かうやうの遺意にや侍らん。」

一言付加えておくと、ここでの「蓬菜」とは、本来『史記』に出てくる東海の中にあるとされた三神山の蓬菜、方丈、徧州の一つである。その蓬菜山の形を台の上に作った飾り物は、平安時代には貴族の祝儀や酒宴の装飾甲に用いられたが、室町時代から正月の祝儀用となったそうである。除夕の夜半12時に、寺から百八つの除夜の鐘の音が聞こえる。これは中国の宋の時に起こった風習である。百八つの由来についてはいろいろな異説があるが、普通は百八つの煩惱という仏教思想に基づいたことだと考えられている。

日本では鎌倉期以降、まず禅寺で行うようになった。当初は中国の寺院と同じく、毎朝毎夕二回、百八つずつ撞いたが、室町ごろから、除夜だけのものとなった。元旦になると、民家では、早朝に天地、祖先、諸神への礼拝をする。この漢代からの祖先祭りの風習は、中華民族の人倫道徳を重んじる觀念の表れであり、封建宗法思想の民族心理の反映でもある。祖先諸神への礼拝をすませ、一家次序をもって家長に挨拶をする。これを「拜年」という。後漢の崖是の『四民月令』では、「君、師、故将、宗人、父兄、父友、友親、郷党の耆老に調賀する」ことを書いてある。拜年は親族および地域社会との結びつきを確認する重要な行為で、誰も欠かすことはない。しかし、自分でいちいち回るのは大変なので、「投刺」の風習が出てきた。刺は名刺である。

西漢時代、「名刺」を「謁」といい、東漢時代に「刺」を称した。すなわち自分の名前を刻んだ竹の板である。「投刺」とは、他の人に年賀の名刺を届けさせることである。

### 3. 大同小異の行事項目

中国と日本のお正月前後の行事項目を一覧表にして大変驚いたのは、それぞれの項目には同じようなものが実に多いということである。

中国	日本
腊八	蠟八会
扫房	煤払い
年前的市集	年の市
除夕	大晦日
拜年	年始回り
祭财神	初詣
人日	七草粥
元宵节	小豆粥の祝い

上に並べている主な項目を対比すると時間や内容などはほとんど同じである。例えば、時間的には中国の「过年」と日本の「年越し」ともに年末の12月の8日から初めて、正月の半ばまで続いているというものが似ている。そして、その「过年」と「年越し」を祝うやり方には同じようなものもある。例えば、年神を迎え、年始回りをする（中国で「拜年」と呼ばれている）、一家が揃って食事をし、祭る活動（中国の「祭财神」と日本の「初詣」）、飾り物や食べ物などはさすが同じ儒教、仏教との思想の下での友好国である。

## 4. 行事内容の違い

正月行事の項目に同じようなものが実に多い。しかし、その行事の由来、縁起、やり方は大分相違しているものである。

### 4.1 飾り物の違い

中国では、正月には必ず「春联」と「門神」を貼り付ける。その由来は昔の「桃符」であり、桃の木には「厭伏邪気」を払う（邪気を払う）という力があると信じられている。最初は桃の木で彫った人形と「苇索」（葦の縄）を飾っていたのが、その後には桃の木の札に変わり、そして紙の「春联」に変貌してしまったのである。ここで「春联」の役割に注意しておく。「春联」は桃の木の人形と「苇索」の時代から、そして、桃の木の札時代まで邪気を払う魔除けの作用を持っていた。後には、字を書いた紙に様変わりして、魔除けの意味合いは薄らいだものの、書いた文句によってはその役割がまだ残っていると感じられるのである。

一方では、日本の正月に欠かせない門松は、話によると中国の唐の時代、松には悪魔を払う力があり、正月に松の枝を門にさすという風習が平安時代に日本へ伝わったそうである。しかし、本場の中国のある地方では正月に松を飾らない（中国の他の地方には松を飾ることもある）。その違いもさることながら、もっと注目しておかなければならないのは、魔除けの松は今日までその作用が続いている。それにあわせて注連縄のように清浄な場所の印となっているのである。「春联」やら「注連縄」やら全部魔除けの作用を持っている。実は「過年」と「年越し」に対する意識の中の依代というものもあり、魔除けと共存している。魔除けと意識された場合は、「過年」の「年」は「過年」伝説のとおり悪魔であり、広くいえば猛獣、化け物などさまざまな悪ものを含む。それを家に入らせないように呪いをして災難を逃れてうまく乗り切ろう、無事に過ごそうという考えが底にあるという意義を持っている。

依代の場合は、年越しの「年」は年神様になる。日本には鬼の姿をした遠いところから訪ねる神が、正月の夜に人家に降りて来るという伝説が今まで伝えられている。だから、日本では、その年神を家に迎え入れ、神様に守られながら、皆一緒にその時を過ごすという意義が働いているのである。つまり、魔除けは悪い物を家に入らせないようにする意義からきたものである。依代は家を守る神様を家まで案内して入ってもらうという考えから生まれたものといえる。

今一つ、桃の木について。松の木という違いも大切な意味がある。桃は中国原産のバラ科の落葉小高木であり、日本でも古くから栽培され、邪気を払う力があると信じられている。桃の木の由来は、昔の「夸父追日」という神話のなかの夸父の杖から変化したものという説があり、または、東毎度朔山には大きな桃の木があって、その下に神荼と郁垒という二神がおり、もっぱら悪鬼をとっ捕まえるから、その桃の木も木の精とみなされ、邪気を「圧伏」することができると思われるようになった、という二つの説がある。しかも、王母様が誕生日パーティーの蟠桃宴に諸神を招き、昆仑山からもいできた蟠桃を食べ比べたら、みな不老不死になったという神話からみると、桃は長寿を象徴するという意味も生まれた。中国では、現在いうまでもなく、桃符を使う時代にせよ春聯に変わった時代にせよ、ずっと桃の木が魔除けを持つと固く信じられていた。

しかし、日本では桃の木に邪気払いの力を利用した節句は正月だけでなく、3月3日の桃の節句（ひな祭り）がある。そして桃の代わりに松の木を用いて飾っている。桃に対して松は常緑高木で中国にも日本にも種類が非常に多い。それに、長寿や気高い節操を象徴するものとして、古くから尊ばれている。神も不老長寿で人間の願いを聞き入れ、叶えてくれるし、幸福などといったものをもたらしてくれる超人的な存在である。その神の依代、調べてみれば、通みちにつかうものは、冬という季節には葉も花もない殺風景な桃よりも、常緑高木の松の青々とした枝のほうが生き生きとした新しい生命力を象徴するのには一番ぴったり合うと思われたから、今まで、ずっと正月

の飾りに使われたのである。

それに、中国原産の桃が日本に伝わった前に、日本にはもうすでに松が正月の飾り物といわれる習慣が出来上がっていたから、桃の入りこむ余地がなかったのである。

#### 4.2 食べ物の違い

先祖や神様を迎える過年と年越しであるから、いろいろ縁起を担ぐ供え物と食べ物は年末年始に種類が多い。しかし、中国と日本ではそのほとんどが違う。一番大きな違いは何とんでも、陸と海の区別に違いない。

その理由は、中国と日本はともに温帯気候に属するが、中国の大部分は内陸に位置し、温帯大陸性気候に属し、また日本は海に囲まれている温帯海洋性湿潤気候に属する。中国では海から大分離れているから、空気が大変乾燥している。したがって、中国の年末年始に使われる供え物や食べ物は陸で穫ったものがほとんどであり、魚はもちろん海の魚ではなく、川の魚である。その中でも、鯉が一番ポピュラーである。

一方、日本は海に囲まれているが、山地も多い。だから、年越しの食べ物と供え物は海の幸と山の幸が大半を占め、魚は海の魚に違いない。中日両国で同じものは、餅、大根、豆などである。その理由は簡単に想像できる。当地で穫れ、保存のよく利くものだからである。他には、新年料理について、中国では一番有名なのが餃子であり、全国に渡って、正月に餃子を食べる習慣がある〔南方は餡入りの白玉団子や年糕（日本の餅に似ている）を食べる習慣もある〕。日本では「年越し」に重要なもので、どうしてもなくてはならないのは「おせち料理」である。元日は神様にお供えをし、家族が揃って節振舞にあずかる。これがおせちの始まりとなり、今はお正月の料理をおせちと呼ぶようになった。おせちは五穀豊穡を願い、家族の安全と健康、子孫繁栄の祈りを込めて、縁起の良い食材の名に事寄せて、海の幸、山の幸を豊かに盛り込んだものである。おせちは昔から、五法・五味・五色をバランスよく取り入れて作るのがよいとされている。

地理環境や民族風習等々が違うことによって、料理の味も違う。中国では国土が広く、四方からの味をあわせ、料理の種類も豊富にあり、地域によりそれ自体の特色を持っている。日本では、料理の基本的な特徴はあっさり、精巧、儉約などであり、特に「おせち料理」からこれらについてみるとわかる。おせち料理の一部分をみてみよう。

【伊達巻】古代の伊達者（シャレ者）たちが着ていたドテラに似ていた。

【黒豆】この黒豆がお正月に登場するわけは、「まめ」が丈夫・健康を意味する言葉だったからだ。

【田作り】豊作を願い、小魚を田畑に肥料として撒いたことから名づけられた。五穀豊穰を祈る。

【栗きんとん】黄金色に輝く財宝にたとえて、豊かな一年であるようにという願いが込められている。「勝ち栗」ともいう。

【紅白蒲鉾】紅一めでたさと喜び。白一神聖。

#### 4.3 縁起の違い

縁起のかつぎというのは、縁起のよいものの発音と同じよいことが連想される場合、例えば、中国の魚（魚=余。余るほど豊かであるように年々魚（余）がある）、江戸のたい（めでたい）、あるいは、そのものの形や性質から何かよいことが連想できる場合、例えば、中国の「元宵」（丸い形=団欒や円満の象徴）、また江戸の「数の子」（子孫繁栄の象徴）、もしくは、発音が形の両方を兼ねて連想される場合、例えば、中国の「餃子」（餃=交：跨るとの意味、子=子夜：形が昔の「元宝」に似ている、新旧年に跨る子夜に食べるもの）、日本の「年越しそば」（細くて長い：長く生きると言う意味で食べる説がある）といったようなものである。その中でも発音からの連想、つまり語呂合わせのものが一番多い。そうになると、発音は勿論、文法も違う中日の言葉から作った語呂合わせは、いうまでもなく当然、違ってくるのである。例えば、正月に欠かせない食べ物として、中国の年糕に対する日本の餅。中国と同じもの（同じ材料と似ているつくり方）であるが、年糕は中国語で「糕」と



「高」は発音が同じであるから、年々の暮らしが高くなるように祈る気持ちが込められている。餅のほうは、古く弥生時代から日本人の食生活に密着していて、色も純白であるし、そして粘り強い性質であるから、白を慶事色とする日本ではめでたい正月の食べ物となったのは何か不思議である。日本人の淡白な気持ちに関するかもしれない。

#### 4.4 年越しを行う時間の違い

中国では、昔から一日の始まりを子時とする。つまり夜の12時前後である。だから新しい年の最初の日を迎えるため、古い年の最後の日、つまり、「除夕」から具体的な準備をして、夜になっても寝ないで、子時になった時先祖や神様を迎える儀式を行い、それから家族の間で新年の挨拶をして、遊びながら夜が明ける。そして、元日に年始に出掛けて過ごす。中国の曆書の考え方をほとんどそのまま受け入れた日本では、夜半の子時を一日の初めとする考え方は一般的であった。いずれにしても、日本でも、昔は年越しの行事は中断することなく夜通しで行われていたのである。

ところが、現代になると変化がみられた。これは年中行事の一覧表の大晦日と元日の行事内容をみれば分かる（次頁の表を参照）。一体どうなったのか。まず、大晦日と元日の行事項目別にみてみよう。

一覧表をみて分かるとおり、中国では正式には2回の儀式を行う。先祖を祭る「祭祖」と神様を迎える「接神」である。一方、日本ではそういう儀式が一度も行われぬ。普段は家で拝するし、あるいは、神社へ行って拝する。まとめていえば、家では特別な儀式が行われぬことである。儀式の有無等、先祖や神様を迎える時の考え方が違うのである。その考え方の違いは、正月にする飾り物の意味するところと関係がある。

中国の正月は飾り物（春联、門神）、魔除け、厄除けであり、先祖や神様を迎えるものではないことは前に述べたとおりである。だから、夕方、日が暮れた時にまず設置しておいた祭壇に線香を上げて、先祖を迎え入れる。そのあと、先祖と一緒に「晚宴」をする。さらに、年ごもりをして、子時に諸神

中国	日本
除夕	大晦日
点景（飾り付け） 仏壇，祭壇 祭祖（先祖を祭る儀式） 晩宴（家族団欒の晩餐） 守岁（年越しの夜更かし） 接神（諸神を迎える儀式）	すでに28日まで済ませてある 年徳棚 年越しそば 除夜の鐘 厄払い
元日	
団拜（家族内での新年の挨拶） 压岁钱（お年玉） 拜年（年始回り） 送財神爷的（商売の守り神の画像 を売り歩く者）	若水 屠蘇 雑煮 おせち料理 お年玉 初日の出

を迎える。これに対して日本では、正月の飾り物は依代という意味であるから、門松や注連縄を飾った時から先祖様や神様が来ていると認識しているか、あるいは、その時からいつ来てもいいという認識が働いている。したがって、家では普段と同じように拝することであるから、特別な儀式のようにすることはない。今一つは、中国では先祖様と神様を迎える儀式が別に行われるが、日本では正月は年徳神を迎えて祭るだけであるから、特に先祖様を迎える意識がない。あるいは、日本のほとんどの家では仏壇が常設されていたので、先祖様がいつも一緒だと考えるから、わざわざ迎える必要がないということもある。

この他にもいろいろな違いがあるが、本稿では代表的なものを列挙した。このようにしてみると、中国と日本とでは正月の行事には特に大きな違いがあり、飾り物や縁起のかつぎや过年（中国語）と年越しなどに相違がある。

## おわりに

以上述べた行事は、実はほとんど法律上の祝祭日に行われるものではない。しかし、残念なことにその大部分は形式化し、商業化してしまっている。中国では、除夕における家族団欒の晩餐はますます多くの人がホテルへ予約し、夜になると一家が揃ってホテルへ行って食事をし、費用はかなり高い。日本の家庭は、昔は年末に餅をついたり、おせち料理を作って準備したものである。しかし今はデパートで日本料理店から「おせち」を買って間に合わせる家庭が多くなった。特に、核家族化になり、年寄りがいないから、作り方を教える人もいないこと、洋風の食事に慣れた子供たちが「おせち」を食べたがらないことなど、様々な要素がある。中国でも、子供や大人が餃子などの伝統的な食べ物を食べたがらない人が少なくない。

これらの変化は時代とともに変化してきており、これからも変わっていくに違いない。要するに、中日両国は古代から友好関係を持ち、中国は日本に大きな影響を与えた。しかし、歴史、社会環境、民族精神文化などの違いによって、行事項目は大同小異であるが、具体的な行事内容において大きな違いがある。これは正月の比較からみてもわかることである。食べ物、飾り物、縁起かつぎなどの内容において違っている。もっとも、世界中すべてのものが絶えず変化・発展しており、行事も時代にあわせるように変わりつつあるといえるのだろう。

### 参考文献（著作引用）

- 1 王秀文 金山編 山鹿晴美、金泉郁夫审校《日本社会文化读解》大连理工大学出版 2004年8月
- 2 马凤鸣主编 刘桂敏副主编『現代日本人の風俗習慣』大连理工大学出版 2001年3月
- 3 大森 和夫 大森 弘子 曲维著《日本》(上) 大连出版社 1997年12月
- 4 李抗美 潘寿君 潘蕾 编著《日语模拟导游》旅游教育出版社 2004年9

5. 张立新 孔繁志 主编 李均洋 李国栋 审定《日本概况》北京大学出版社  
2002年8月
- 6 佐佐木瑞枝 原著 陆泽军 赵军民 编译《日本世情》外语教学与研究出版社  
1995年9月